

例中 1 例では腎機能の改善が見られたが、1 例では 5 か月後も機能低下が残存していた。腎動態シンチグラフィは ESWL 後の腎機能の経過観察に有用であると思われた。

13. Economy Class Syndrome の一例

横山 邦彦 秀毛 範至 絹谷 清剛
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)

エコノミークラスでの長時間飛行後に発症した下肢静脈血栓症および肺塞栓症の一例を報告する。57 歳の白人男性(身長 190 cm, 体重 106 kg)が米国から飛行機で来日し、翌日より下肢の腫脹と疼痛が生じたため入院した。下肢ペノグラフィでは、深部静脈系は開通していたが、肺血流 SPECT では左肺の S^{1+2} と S^6 に血流低下が認められ、肺血栓症と診断された。血栓溶解剤により症状は改善し、退院した。本例のごとく、狭い座席に長時間下肢を折り畳まれ座っていることにより、下肢静脈の鬱滞と血栓生成の危険性が指摘される。予防には、飛行中一定時間おきに歩行し、水分を十分にとり、アルコール飲料の過飲による脱水を避けることが必要である。また、このような長時間の旅が、肺塞栓の原因となることを考慮することも重要である。

14. Triple Energy Window 収集による散乱線補正法の局所脳血流定量値におよぼす影響

辻 志郎 絹谷 啓子 久慈 一英
市川 聡裕 隅屋 寿 利波 紀久
久田 欣一 (金沢大・核)
山田 正人 (同・RI)

Triple Energy Window 収集による散乱線補正法により得た $^{99m}\text{Tc-HMPAO}$ SPECT 像(SC 像)とそれによる脳血流定量値を従来法と比較した。SC 像ではコントラストが改善し、灰白質/白質血流比はカウントで従来法の 1.75 から 2.34 に、Lassen の補正による血流値で同じく 2.43 から 3.72 に改善し、X 線 CT 像の低吸収部位は血流値で 10~15 ml/100 g/min から 0~5 ml/100 g/min に低下した。ファントムにおいて SC 像は中心部の過小評価が示唆されたため、吸収補正についても検討した。Chang の補正において、補正範囲は皮膚まで含め、さらに骨の吸収を考慮するため皮膚の外周より 5 mm 程度大きく設定した。補正像において中心灰白質と

皮質との比は従来法とほぼ同等の値を示した。

15. $^{125}\text{I-IBZM}$ による脳ドーパミン D_2 受容体画像化、定量化のための基礎的検討(第 3 報) —Bolus and constant infusion 法による true equilibrium analysis の検討—

中島 弘道 松村 要 中川 毅
(三重大・放)
外山 宏 前田 寿登 竹内 昭
古賀 佑彦 (藤田保衛大・放)
市瀬 正則 J.R. Ballinger
(Mount Sinai Hosp., Univ. of Toronto)

平衡法では線条体/前頭葉比 (S/F) が理論的に線条体の受容体濃度を表す。Bolus and constant infusion 法をコンピュータ・シミュレーションにて検討した結果、総投与量の 70% を bolus 注入し、その 60 分後より残りの 30% を 60 分間で constant 注入する条件にて S/F は一定になった。同投与法をラットにて行くとシミュレーションとよく一致した。Bolus and constant infusion 法は SPECT での脳ドーパミン D_2 受容体の定量化に有用と考えられた。

16. 一過性に高血流領域を認めた Sturge Weber 症候群の一例

松村 要 竹田 寛 中川 毅
(三重大・放)
青木 茂 平野 忠則(松阪中央病院・放)
渡辺 佳夫 町井 克行 (同・神経内)
葛原 茂樹 (三重大・神経内)

症例は 72 歳女性、左顔面の母斑、CT にて左後頭葉の石灰化があり、Sturge Weber 症候群として経過観察されていた。平成 5 年 9 月 20 日夜、体を硬直させ奇声を発する癲癇発作を起こした。その 2 日後の $^{123}\text{I-IMP}$ 脳血流シンチでは、左側頭後頭葉皮質に局所的な血流増加を認めた。しかし、さらに 26 日後の脳血流シンチではその部分の血流は低下しており、血流増加は癲癇に伴う一過性のものと考えた。Sturge Weber 症候群での脳血流シンチ所見についての報告は、ほとんどが病変部位の血流低下である。しかし、本症には癲癇がよく伴い、その発作直後には局所的な血流増加が起こることが示された。